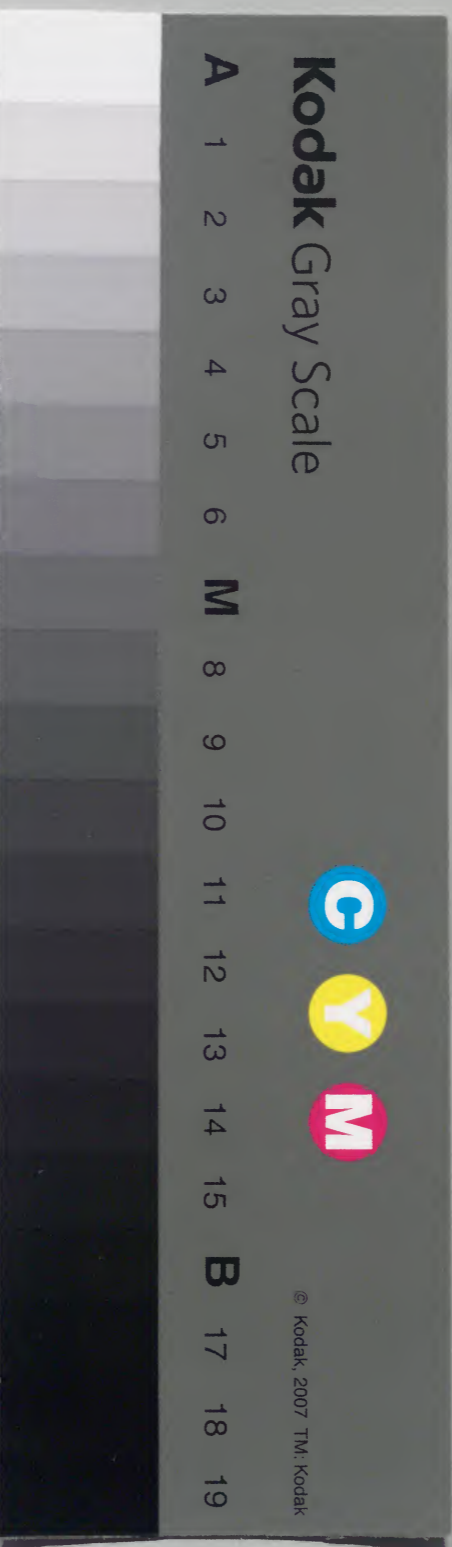
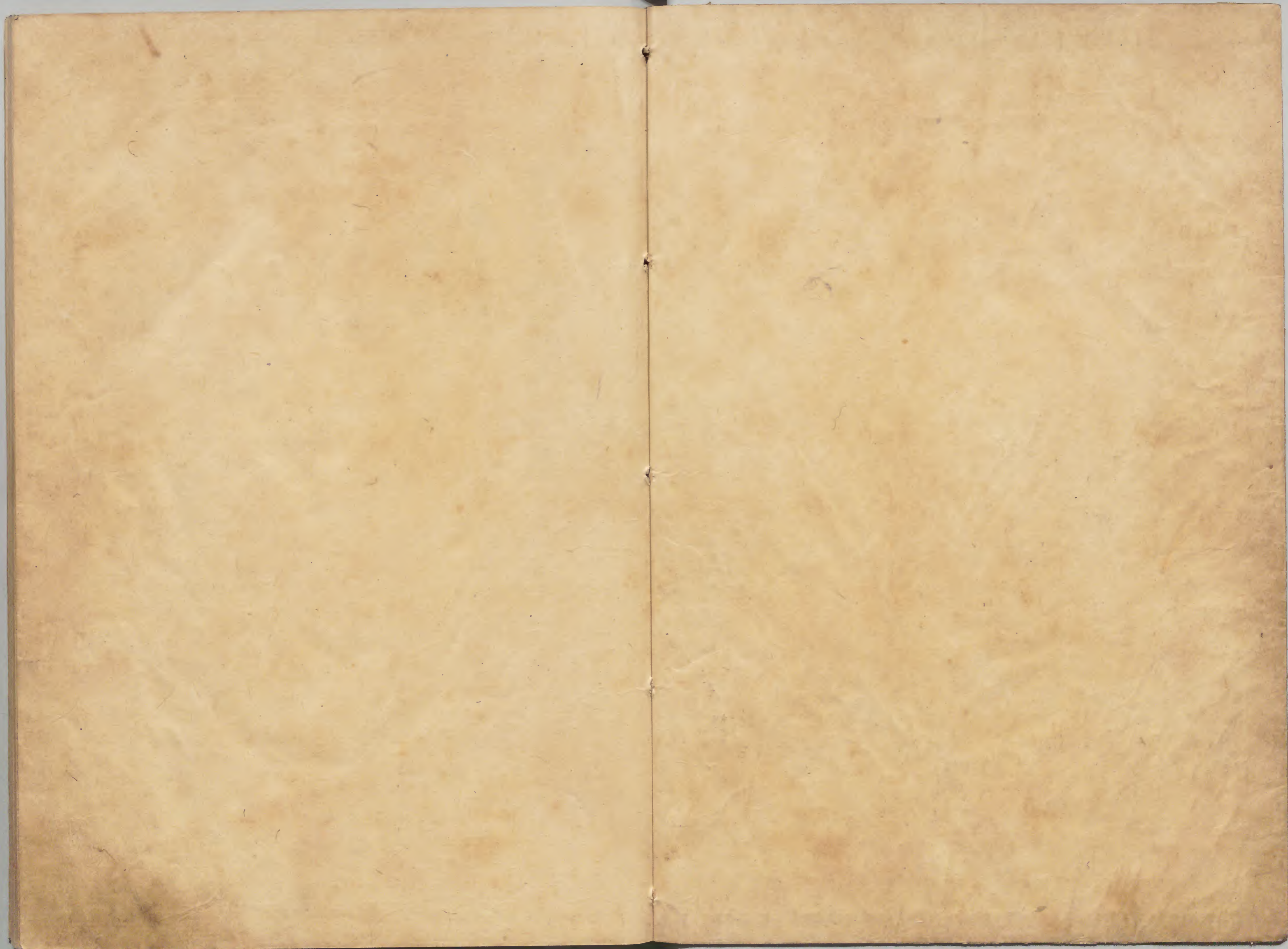


寛永諸家譜

藤原氏戊二冊之内一
道兼流

内閣文庫			
番號	和	20199	
冊數	186 (100)		
函號	特	76	1





大久保

寛永諸家系圖傳

藤原氏

戊一 山家

道兼流

大久保

道兼

法興院持政道家此二男栗田実白と
号次

淺草文庫

道隆 みちたか

正二位 ただふたゐ 中納言 なかつなごん 栗田左衛門督と号す くりたさゑもんとのとごうす

道房 みちふさ

正四位下 ただよゐげ 中左衛門 なかつさゑもん 淡波守 あふなみのり 海守 うみのかみ

宗尚 むねたか

守都文乃彦 もりつものむねのひこ

宗繼 むねつぐ

八田持守 やちだのぢもり

朝繼 あそつぐ

守都文左衛門尉 もりつものむねさゑもんゑい 武者所 むしゃどころ

成繼 なりつぐ

左兵衛尉 さへいゑのり 左衛門尉 さゑもんゑい 大庭二郎 おほのゑにじろ

頼總よりとも

源三郎げんざぶろう

字 敏文しづのとしや 檢校けんぎょう

恭總やまと

正六位下ただしむろゝのり

下野守しもつけのり

系總けい

從五位下したがひご

尾張守おわり

下野守

貞總まこと

從五位上したがひご

備前守びぜん

下野守

冬河守ふゆがわ

恭宗やまと

五男ごなん

常陸介ひらたけのすけ

左衛門尉

法名蓮惠はつな

時總とき

冬河守ふゆがわ

左衛門尉

法名蓮意はつな

藤藤

左近将監

法名蓮常

冬列 和田 妙因寺乃あり 位と

家紋 左巴 多指とく 紋とと

常意

道意

宇都文をあり 宇津と和

道昌

婿男 辰翁をふく 松平より 卦と
信光より 了

常若

八郎右衛門尉 童名 辰翁
信光より 了

忠与

三郎右衛門尉 法名覺永

忠茂

左衛門五郎

享文十六年二月四日死す

法名源秀

忠俊

新八郎

子孫ありあり 譜系あり

忠貞

平右衛門尉 字津とありたれ

大久保と稱す

享文あり 廣忠郷十二歳乃御とす

坊列あり ちとす けし忠貞が

兄新八郎忠俊（あにあらはちろう ちゆうじん）とて一族（いっく）これ
同志（どうし）乃者（なるもの）曰人（いひひと）也（なり）お謀（まか） 廣忠郷（ひろちゆうきやう）とし之
是諱（このな）乃（なるもの）城（しろ）入（いれ）なり 別（わか）忠貞（ちゆうしん）也
すこし切（き）あり

同十一年 廣忠郷乃叔父（おとじふ）花人（はなひと）位定（いぢやう）
野心（やんしん）ありしに於（お）此（こゝ）孫（まご）三郎（さんらう）を
花人（はなひと）より属（まゝ）と忠貞（ちゆうしん）と忠俊（ちゆうしん）お謀（まか）て
孫三郎（まごさんらう）を呼（よ） 廣忠郷（ひろちゆうきやう）より入（いれ）なり
これよりよるは花人の家人（けにん）なり

廣忠郷より属（まゝ）次（つぎ）

弘治元（こうじげん）年（ねん）有（あ）別（わか）蟹江合戦（かにゑがしやうせん）の事（こと）記（し）
忠貞（ちゆうしん）より一（ひと）人（ひと） 婿男（むこをとこ）忠世（ちゆうせい）次男（つぎをとこ）忠俊（ちゆうしん）
より一（ひと）人（ひと） 同志（どうし）乃者（なるもの）七人（ななびと）とて一（ひと）人（ひと）
挑戦勝利（てんせんしやうり）とて一（ひと）人（ひと） 款（くわん）しげく城（しろ）に
いれ

永禄三（えいりくさん）の冬（ふゆ）列州（りやうしゅう）屋（や）十八（じゅうはち）所（ところ）繩（ひも）ひ
の合戦（あひせん）一（ひと）款（くわん）ありしをみまゐる忠貞（ちゆうしん）
忠世（ちゆうせい）忠俊（ちゆうしん）これより一族（いっく）より一（ひと）人（ひと） 忠貞（ちゆうしん）
忠世（ちゆうせい）忠俊（ちゆうしん）これより一族（いっく）より一（ひと）人（ひと） 忠貞（ちゆうしん）

五人ともに勅戮されをやがふ
天正十年十二月十二日七十三歳で
死す

忠世

七郎右衛門尉
天文十五年冬列後村合戦のとき
忠世十五歳より幼く歎と純と
ありし事一日より百歳あり

同十七冬列山中合戦のとき忠世
一族とあひともに歎とらるるを
やがふ

同十八年冬列安祥乃城とせしり
と記忠世歎とあひし事一教夜
ありしつ井より此首級とせしり
弘治元年父忠貞と弟忠依等あひ
も列蟹江小とせし事一戦功あり
永禄三年も列石瀬合戦も忠世

忠依同輩五人あひまゝに款と純と
ありをうり

同年冬列川屋合戦乃と紀忠貞
忠依等とあましく戦切あり

同六月冬列一向宗略記の如記

東照大権現の正家人枝宗門の家

おろく款一属とあはれり忠世が

一族冬列和田村よりあひ大久保

新八郎が宅を城と同志乃まの

あつめくあれをゆまら十月より

翌年正月より中々合戦と

いふどもいふも雌雄を尖せどろか

秘く

大権現よつげとくほつりくもつて和隆

の事とお儀とあましくあひま

申平均と

元龜三年

大権現と武田信玄を列三方原

をひく合戦のとき忠世が去り歎と
おもひつり終をありせ歎の足跡返
おもと去りつりとも大歎又競あり
りりり味方利とくくく忠世と
後りりもせありり

大権現り告をそほつりいふ家
つねに遇はれ味方此諸將とお約
そのくその返敵すれとくく乃軍士
と川ひく一所りありありあり

乃ひひり

大権現はとみやうり濱松の城へいせ
と海あり

大権現は方り一應と海あり
本忠世りりりり海あり
屏障乃西よりり旗を奉り時
ありり返あり軍士ありあり
歎とくくくくくくくくくく
と鉄炮をくくくくくくくく

歌うれと追ふりあつてさうれ
信玄ハ犀峠乃近邊一陣と
忠世もゆき諸子の鉄炮をあつて
信玄が旗本一うらけうり歌
軍騒動と信えれと集めと
天正二年

大狩現兵をすめを列乾よ
川あがりぞう初りとくび歌うれ
軍乃うらをうの忠世殿と

歌をうらようり歌を

同二年冬列長篠一と

大狩現と武田勝頼合戦のと紀藏回

信長兵と川と一軍乃あひ

さうり柵を搦あひさう信長の兵

柵乃あひいぞゆふたうんやす

忠世もゆきその家人騎る者

をまうと歩卒と一前陣よ

あふとき忠依此さうりてい

今日乃軍よ信長の兵と云く先登
しつしひふと紀ハ家君れ馳なり
とこや人に足将をいして合戦
をいじいといふ忠世すなうら
うれ兵とけけ忠依よさづ
大権現乃命いといふ家が徳徳忠
うらまきと云くいふ歩兵と云
鉄炮をきこせく忠世が徳よおとじ
志い徳一騎馬ハ一騎もいふなり徳

いふの旨成敵者有る日下部兵右衛門
それをうきふ留りれうらをい
忠世忠依徳よれ鉄炮とけきい
急りいそみたりふわがゆし勝頼
の先も彼を諸軍おひききりて
款兵とうら勝頼大り一級少と

日年

大権現を列二僕の城をせめしきり
とこ城いまぶおらす

大指現兵とあさめくわつてをゆふ
 と記忠世とゆりくその壘とま
 りり忠世武備を志めく對陣と
 今年を列二侯乃城よりりて
 とくく忠世これゆりり時

大指現光明城をせめをまふ
 同年乃冬二侯乃城主城とのごき

大指現二侯を忠せりりきゆりりて城

とゆりり

同日年

大指現乾の城を攻ゆふとき忠世兵
 を率ひく嶽山より出たりり
 乃がり俯しり敵乃城を忍り進
 くとふ敵乃天燈之内右出城とより
 て山より入忠世約命とらちりゆり
 いより山中よとゆりち去と率て
 敵とせひり事には今年よりりり

山中とくく平く

日十年

大指現甲列をせめたまふとき忠を
先鋒として伝列りしつこ
敵軍とあひこふ國中の者風
をのぞみしあれしるびくろけり
伝列乃玉士先方衆と又敵とるとその
あきあり忠世射陣志く今年
よると日十三年よとり合戦とるり

やゆずありひそ敵壘をせめやがり
ありひハ初睦を後しとあきと服
より事しとるつごおほしそれあひ
乃戦功あきくくふるす家人等
そのく軍忠をくげゆすを著
りのふ六人

大指現御感状とをゆふ
日十八日園白をけ秀吉大軍と率く
相列小田原乃城をかこむりとき

大將現兵と率ととををいし
城乃おつりおびてら
秀吉より其子城小山と進忠世と
呼これとさつて後
大將現忠世と小田原城主と一領地
口力五子石を授ふ
文禄三年九月六十三日
死と 日脱

忠佐

治古歩尉
弘治元年列解江合戦乃と
忠貞忠世とあひもに軍功あり
同二年列乃軍お田原六勝家
兵と列被貝り
合戦のと紀勝家川志とぞく乃列
忠佐るとと急り
軍りり陸をまつて勝家と突
勝家逃りぬ

永禄三冬列川原合戦に進く
城の色より一族より日軍
八人と徳を伸く敵をうら勝利を均
きり

同年冬列川原合戦乃と記忠世等
と五人敵軍より破れ

同六年一向宗一揆のとき毎日毎夜
合戦しそのあひだ敵去れ面あり
とひく敵と徳とあり事三度

りをうぶ氣まじ武勇を感
美とこれか戦を擣一敵と撃
事一救度よりこれども味方さど
をうぶ氣まじのかりりわがゆり
大権現より若きとゆつと和睦の
とらりこととめつと

同七年冬河津池合戦に忠佐
眼方より徳をとりて横一敵を
うらとこれに紋をせし

同十二年

大権現達列 是川をせめ天王山少く

くくい終ふとき忠佐一妻よみて

敵陣よりいりしうれ軍將と斬て

首をさらしうれと敵と

元亀元年の江列姉川合戦忠佐

命とけしゆりし軍勢と指

揮一敵とらやわれ

同三年達列見付合戦一 大敵

競ふ忠佐をいりし牙部七郎

都筑友一郎大久保荒之介に人敵

より此ときな多平八郎忠勝るとせ

敵陣とけしきりすくよ忠世も

又きりし是よりいりし流るる命

を全ふして天竜よりいりし

同年十二月三方原合戦のとき敵

兵勝りし乃終つていりし忠佐首級

をいりし

天正三年長篠合戦の別忠依
信よりしるし忠世が陣よりしるし麾下
の諸軍足将鉄炮をつきしりあま
しりけりかりれく鉄炮と武田
勝頼が軍中よりしるし大りしれと
やがふ
同年を別諏訪原よりしるし
せめたりしりしき卯乃割り辰
乃列りしりし甲士二人よりし

うれ首とよりしるし鉄と

同十二年尾列長久手合戦
忠依 命よりしけりゆり地身と
之陣よりしるし鉄とよりしり池田
勝入森氏苑守長一よりしり
忠依先よりしりありて足将とよりし
鉄炮をよりしり挑りし鉄とよりし
故を寸軍やよりし

大指現忠依よりしりしり 浪色忠七よりし

命いのちどくみの戦場いくさばよりとひく

徳とく七乃甲しちのこうしをもち志こころあをゆふ

を長なが五ごの園せき原がら陣ぢん乃のとふを

名な徳とく院いん殿でんよりきこひをそとつ

志こころ田でよりくれうれり軍ぐん陣ぢんより

大おほ権けん現げんの魔ま下かよりありとを

大おほ権けん現げん少せう幼ごう雅みやびれ沖おき時ときより教しやく友ゆうの会かい

り毎まい度ど忠ちゆう依い信しんをせずと事こと子こ

ありひハ歌うたをうらありひを徳とくと

ありとれ事こと阿あ者しやくくふ徳とくより

白しろ刃やいばり矢やれあひよしゆりり著あり

とられ武ぶ具ぐ志こころをく斬きやぶりゆ

い徳とくどもつ并ならり月つきを金かねよりそ

疾はやをくくゆ

目め六むの駿しん列れつ沼ぬま津つの城しろを忠ちゆう依いよ

をゆりり二ふた万まんふれ地ちを徳とくと

日ひ十八じゅうはち年ねん七しち十じゅう七しち歳さいより死しす

某

大八郎

永祿三年友波繩よりとむ
二十二歳少くは死に

某

新苑

元龜三年幸列三方原
より二十六歳して死

某

幼七郎

天正二年幸列乾
二十歳少くは死

忠為

秀十郎 権右衛門尉

三正名

大指現東冬河津進敷のとき
敵兵競ふる忠為法をとりくお
敵兵引去りし時

大指現乃信一りのゆゑに敵兵救
多るなりと之をもとむるに川を
ぞくのゆゑ一り身と命をなす
ゆゑに白後敵兵敵多れと二人
やしてお橋を命に次となり
日二年を列乾一りをひく
味もいふ志りぞくるとき敵兵
後よりとむ忠為兄忠世と上
敵して敵をうらみこれを故を

きーじ

日三年を列二候城と兄忠世
一り流りなりと

大指現忠世一りのゆゑに城ハ
敵兵のゆゑにひるりてれど忠世が
一族をしてあひまゝにせ
命ふとの旨一り忠為も又
忠世一り一房寸うけらり忠世お兵
小田原乃城とほもれの時忠為を

浦の坡地よりうづり住と
安永十四甲子石川自友以忠總濃列
大垣の城を領せられた時忠為を
あいともなりんとし忠為許儀を
志すればもぞり
大権現乃と安より達時よ忠為とめて
乃のゆり忠總少成なり忠為是
志すがりん事 上意よるふの旨
るり

同十九年大坂清陣乃と紀歌
兵多藤橋より出法と忠總少
忠為の忠を述ひ鉄炮とる
とさり

大権現と使として加兵氏少将
豊崎の忠とをゆり忠總少
軍より忠為これといさめくすみ
やうこそと川と忠總少
命とすられ

元和二年

大権現神不例乃列忠總とび

忠為と 伊前より

約命一とく 年未此事に

をよび忠為一のいほく

信子大垣よ新田をひく

一とと新田切とり

一とと包一とと

一とと一とと

忠為一とと

一とと

一とと

一とと

一とと

一とと

一とと

正信

槍古虫尉

寛永十年

將軍家より湯へきまへへゆつふ

同年八月より石水姓組の番と

つとむ

忠知

源三郎

石三郎

慶長十三年

台徳院殿より津湯とこのとこ

忠知十六歳とまらり 侍

よりを侍と

同十四年 武列 谷貫村二又村

よりを侍と

同十九年 大久保お模守侍助氣

をわたり親族よりより

忠知も侍と 惣辰と

同年乃大坂陣乃忠記
橋列平野よりとひく忠記と
うらふ

翌年此大坂陣より
吉山伯耆守忠俊が絶よ屋にて
侍奉を請とむ五月七日平野
急をりしをひく合戦とせり
しゆゆり此列忠記とむり馬
とむりゆり敵陣とやうり城の柵際

小つりく大久保甚右衛門あつひ
城織部等城よりきこりお
あつゆりて一泊ありきこりはよ
いさきありぞくの敵兵殺多すしみ
きこりあきとくこみくえんと
すりと記忠記よりりく汝等味
方とあつゆりやといききバ敵兵
あきとあつゆりのれきき大久保
玄妻从もゆり城方よりきこり

ともし忠俊が陣入りしり凱旋乃
乃ち右に軍切乃貴より上総
の玉新堀村よりとひく米地と
くりく海よ

寛永三年 作をうりあり御
使者とほとあ布衣と恙を執
事とゆりさふ

日九年

將軍家の約命とうちりを海をうり

日付とあふ

日十年 涉書院者の絶以し
り甲列黒釣よりひよ大坪村
りしとひく食色をうり給ふ

日十三年 右に役とありて
涉小姓絶の番頭とあり
日年乃冬に五位下に叙し
たり元より

忠貞

義十郎

安永十九年

大権現より祈禱

元和二年

台徳院殿より祈禱之をよみ

浄小姓總乃番をつとむ

寛永十五年浄歩むらじと

かへり

同十六年乃冬布衣と着す

子とゆらさる

同十八年八月十二日

作

よみ

竹子代君より祈禱之をよみ

忠重

義去清尉

寛永十六年

將軍家と孫礼と

日十八年二月沙書院敷の紀よ入

忠高

市十郎 母八幡垣平右衛門尉長茂の女

寛永九年

將軍家より 謁しきりて

日十三年 作をりて侍と

忠久

源四郎

忠長

甚右衛門尉

元龜三年

大指現乃 約命より 是崎三郎

伝康之よはふ

天正三年 甲列の軍兵を列小山の

城より 楯形信康之兵と致し是と

其の終ふ忠長は是より 小山色

いしをいしと敵とおゆどりいし
勝負を尖せど引継ぐとまに岸
下小おつ志うハあれど敵逃はつとれを
うは事あつとつど信康をまつとつ是
を感して後今をうま小信康主
逝去の後

大指現の叡命よりより兄の忠世よ
属しと遠列二僕よ居し
同十三年忠世よ属しと信列よ

よりと小田原よりと中橋と一良
なつ小忠長よに殿よりれとと
敵兵跡と志う小忠長お我う是と
敵をせしむ敵兵ありハ兵と接
てぶらりものあり忠長うれ兵と
く陣とこまより後忠長と
忠世と不和りうがゆり
大指現乃麾下よ志うグハを
同十八年小田原陣よ信なれと

大指現伊奈備あぢり命一々
のほり忠世と忠長不和なり汝等
より一々和睦せよとの旨あり是
ふより一々海忠世一々尉と
孝又長十一歳五十三歳一々死と
法名日慈

忠重

甚九郎

剃髪一々一々雲と号以江列
膳所よ伯と

長重

甚右衛門尉

孝又長八年長年十五歳乃と

台座院殿一々一々海つ系

同十四年武列二文郷長興村

一々一々領地と一々海

同十九年大久保お模守河勢

をうしおれより長重も河

勢居も

同年冬大坂陣乃時拵列

平野よをいし河勢免と

おれ

翌年の夏大坂陣のとき

喜山伯耆守忠俊が紀よ属志

侍奉——五月七日平野れ戦場よ

そのとき敵をうらむ首とバとす

志とすとき敵兵の先鋒と

やがりよぐれと遊ぐ城乃柵際よ

いしりけと紀大久保及る元城藏部

等お集りて一はよあり志とす

志よ敵兵救多すみきり

おれをうこみうんと守長重と

いしりけいしりけと味方と

を志すすやとす敵兵おれを

吹くくさくハ味方此使者の騎士ら
急ぐとふとさうつげくいさく
大將主事そ此はよありとさう
あつりしとひさくうさう家
陣よいつんとさう時大久保主番七
浦に馳さるる人ともに忠後が
陣はよけれ凱旋のうらは賞よ
しらさく武列吉田つらう日廻
る率沃村さうびよ下総の玉菅丸

村のうらふとひさく合色とさく
さゆふ

寛永五年 作しと御使
妻をけとむ

日八年

將軍家より甲列黒駒村此内さ
いり秋田つらう赤尾村り
そひさく地とらとさう
日十七日 急をさうさるり

伊鉄炮乃うららとるは
同十九年伊持ら此頭とる騎
士十人なりび小歩り同心五十二
人をあづかるふ

長昌

牛之介
母ハ依訪因幡守頼水がじとめ
寛永八年

將軍家を飾礼と

同十六日伊古陀者乃絶りり
伊妻とけとむ

長好

七之助 母ハ長昌とむ

忠教

平助 彦彦守尉

同十四日七月を列乾よとひ
首級とけり

同九年三月廿二日純とらて足部

丹波守をつき本田之水とて是

をうごしち中し首級をたつり

同十一年十月伝列田はよとて

首級とつり

同十二年伝列上田よをひく敵首

をうらとれ

同十三年正月伝列藍本

とつり首級とつり

同年八月伝列上田乃城をせめを

志りせくとに敵兵あつて味

方戦死し余りの三百余人ありけし

忠教と先忠世とたにるを之とかりが

ゆりい流兵みまをゆりて首級

をたつりと凱旋のら諸士軍功あり

その忠教他授とるりくそれを云上

すをよろ忠世と属しとらん

りしとひく軍壘をゆりて

く戦功せんこうとらげゆとるあぢう
うふうふぬぬうう寸

天文十九年大坂陣おおいさかじんのとき

大指おほさし現まりまりま志しささぐぐひひききくくゆゆつつりり御

純まことなりなりととるるれ

翌年あしたねんの夏大坂陣おおいさかじん乃すなはちち記し徳とく人ひと

あひあひつつくくいいくく

大指おほさし現まりまりま志しささぐぐひひききくくゆゆつつりり御

忠ちゅう教きょうされされををききくくてて旅りょ人にんをを乃すなはちち志しささぐぐひひききくくゆゆつつりり御

いいくく家いえ沸わ純まこと乃すなはちち役やくふふよよりり御

旗はたけとと志しふふ一いつははよよありありなんなんぞぞ御ご旗はたけの

志しささぐぐひひききくくゆゆつつりり御

人ひとをを乃すなはちち志しささぐぐひひききくくゆゆつつりり御

台たい徳とく院いん殿でんよよししくくききててゆゆつつりり志しささぐぐひひききくくゆゆつつりり御

ししとと志し

寛永九年

將軍しやうぐん家け乃すなはちち志しささぐぐひひききくくゆゆつつりり御

旗はたけをを乃すなはちち志しささぐぐひひききくくゆゆつつりり御

日十六日二月晦日八十歳少く
死も 法名日清

忠名

平助 彦左衛門尉

元和八年

台漣院殿小洋福也

寛永十六年一月朔日

お軍家の嚴命をうけぬるり父

忠教が遺跡をほぐ

忠職

幼七郎

忠次

新苑

忠雄

善兵衛尉 大河内善兵衛が孝以子也

善兵衛

女子

大河内長去來が母なり

忠隣

治部大掾 相摸守

永祿六年乃冬

大指現一向宗一揆をうらを申ふと記
和田一 渡御あり大久保一族を
とじふとてゆつるはと記忠隣十一歳

なり

大指現忠隣を言説ありと家ころ

子をやしむひ近習の小伝とて

ゆつとるゆふとらまるといひた

てゆつとる忠隣の城をとりし

同十一年を列堀川乃城をせむり

乃と記忠隣城よりゆり敵をうた

はとて忠隣十六歳なり

同十二年今川氏志を列堀川の

城ありあり

大指現あきとせめき海ふとさ天王山よ
をいりし叙父忠依徳をもち敵を
つさ忠隣をいりし首をとれべしと
いふ忠隣がいりし是りの勇よあきと
ささしとまらり敵陣よけりり
らうし首級をとり
同年日必天方合戦乃とさ忠隣
敵首をとりとさ

元龜元年織田信長と物倉義京
浅井長政とい列姉川いりしと
きしふ

大指現信長をとらひし海いしと
あきとさ

大指現法軍よ下知し移し敵を
うらし敵をせしむられとさ長政が
人殺乃一も傍りありしをなす
平八あれをうてとさあかかゆり

涉旗しやきなり忠隣ちゆうりん年十二じふに騎き沈しんお
ろ此陣このじんをやぐり敵てきをうらそ御旗ごき
志しよりかゝるかゝると記義宗きぎむねが人教ひとしやく競きん
まゝにその別わかもゆゑ首級くびかぎとゆり
日ひこの三方原さんぱうげん合戦あつせんのとき
大指現利おほさしげんりとゆゑひひゆゑひ涉退しやくたい
のとき記忠隣きちゆうりんらふと付つななし御
馬うま乃なゆゑををままれれと小栗忠茂おぐりちゆうまう
敵てきののををととりりとと馳はささるる

大指現忠茂おほさしげんちゆうまう一い家け々々乃なゆゆりり
汝なんぢががををととりりとと忠隣ちゆうりん一いささづづけけよよと
ゆゆりり忠隣ちゆうりん 一いゆゆりりゆゆりりのの馬うまよよ宗むね
て付つななし
天正三年てんしゅうさん小山こやま河訪系かわむかひ乃途中なちゆうちゆう
とゆゆりり忠隣ちゆうりん敵てき兵へい少すくききゆゆひひを
ゆゆりりととゆゆりりととゆゆりり
日十二年にっじふにねんを列れつ長久ちやうきうの合戦あつせんのとき
大指現おほさしげんゆゆりり涉物しやくぶつ見みゆゆりりととゆゆりり

りともむさきゆい忠隣一
命どくのつゆりく日か麾下乃共
みごつにもしみ出處うとともり
ども諸士うけりて合戦と忠隣
歌陣よもせ入あひこひ徳を合
歌よつと進く疾をきつとるよも
あひかりかゆり歌とらるりあこ
されり忠隣つとをきつとゆつ事
をこころず天正のころめりりま
を

職り列り一歩分困るひよ化玉
生来乃奉書そのかみ諸る是
と俊と
又録二年

大指現忠隣を

台徳院殿り一けふゆつ一め執
事一とる一こころひ父忠世死
て乃ら忠隣あひつたる小田原城
と海より領地七万石と賜す

天文長五年

大権現大坂西乃丸よおり海とと記

忠隣をせしむるのしゆりて云達

中納言秀忠云冬河守秀康下野忠

自いつれをり河家督よりつととるり

忠隣いさめをりしゆりていさ

右徳院殿涉継嗣しん仁いさめ失あり

りしとんしと云はり井伊兵部少将

忠政林系式部左衛門康政本多中務

大権忠勝平岩之斗親者本多作俊

正伝ありび小忠隣をせしむる河家督

乃りしととるり忠政忠勝親者等とあり

そのく内族あり正伝をみしゆり

三河も秀康武勇揚せり河家督

忠政忠勝親者等とあり

それおりしゆり忠政忠勝親者等とあり

あれみな家大君乃賢息なりとあり

すなわらりしゆり道これと論じりよ

をよむは

名徳院殿智勇ちゆうゆうよそまわりより天下と
ゆづりゆふりよこれ君きみありあつらんを
不可ふかあらんとするも康政やすまつもゆゑ忠隣ちうりんが
よこころれとていざりて
六人おるごとく 伊前いぜん小らくこらく 祖作そさくと
作さくりてゆゑ正信せいしん之のありふること
をよぶよとあり正信せいしん云いふとてはるすま
のよとてその項むかひに忠隣ちうりんよとをゆふ

忠隣ちうりん演説えんぜつよりゆゑ人れと

と記しり

大権現おほいけんげん伊氣いけ名なありて正信せいしんと忠隣ちうりんを
志しすよきを回答かいとうせよせをゆふ正信せいしん又
乃なほていよ秀康ひでやすつ嗣君しきんより徳とくと
あり忠隣ちうりんいよ前議ぜんぎをゆふりて
いよ玉那たまなをせめとねと記しる武勇ぶゆうと
もよむ本ほんと守まもりておさひりけし
又また武ぶ勇ゆうありてありあつるはあつり

長すづくに 物をもつる

右徳院殿より 之をきくゆつりこれ

具負し 一はゆつふよはあすも

玉郡をわら封じりこきハ具負城

もあつて 天下授受乃事

をきくハ 佛子孫長久の基なりなを

私心とけ 一はむ 一はむ 一はむ

あつて 一はむ 一はむ 一はむ

ととと

大権現のゆり 汝等まづ退却すべし

これゆり 一はむ 一はむ 一はむ

なり 一はむ 一はむ 一はむ

乃ゆり 一はむ 一はむ 一はむ

ゆり 一はむ 一はむ 一はむ

小吏定むと云 一はむ 一はむ 一はむ

右命まるとも 一はむ 一はむ 一はむ

四十年

右徳院殿征夷大將軍小臣

御流賀少〜御泰 内乃と記
忠隣騎少〜扈從〜列少
最末〜あり

日十九日正月忠隣少ありて涉劫
氣〜少〜列〜右邊と

寛永五年六月七十六歳少〜て
死と

忠基

庄次郎

大指現〜つ〜海〜近侍と

又縁元年少ありて涉劫氣と

少家〜少〜新報陣〜記と

後將彈少〜屬〜藤

よ〜十七歳少〜死と

忠成

主者以 後五位下

天正四年 後府〜少〜あり

大指現を〜礼とこれ〜忠成十二歳

り

日十八日相列小田原陣日十九日

奥列九部陣又祿二年九列

名護屋陣等みる先忠隣り属

しを陣す

同日年を長秀次謀叛乃あら

ぶあふとき

台徳院殿を質として聚樂乃城

り道なきゆつる急ふり

風説あり忠隣られとゆ

台徳院殿をすめあう伏見へ

らゆつり秀吉と備

忠隣ハ河原野の河原守とつて

大権現江戸あといそと色をこさ

り急し河原あり道を

畫教を急ぎてとて法士志

をくれ伏見し河原を乃と記

を供奉此人やする忠成あり

らるる進寸志を以て侍奉とつてし

文長五年一圓系陣れと記

台座院殿宇部文よりしとくに本首路

を以てし 市上河井とて忠隣り

志とて侍奉と

日十九年大坂陣より山内右衛門守

忠俊が絶よ属し

台座院殿より侍奉と

翌年一六坂陣より侍奉と忠俊が

絶り属して侍奉し五月七日

平野色より合戦のと記忠成

るを以てし敵陣と破り城乃柵

隙よりしと記とて敵あり

より敵れあを以てし玉生この

小おもしろしと記中根大陽守今村

侍白郎が来れよ達するらとて

とて侍奉とつてしとて侍奉と

城藏部大久保左馬允を以てし

志在東の城方なりきつと忠成と一可
よありと暫ありとそら中山動知申を
こころい忠成なりつてきくいとく伊方
乃ほ陣騷動の体あり忠成が旗を
こころい忠成なりつてきくいとく伊方
きつと忠成が旗をりを呼と下
蜂波賀新右忠つとくいとくいとく
きりいもで小戦死も旗乃進退を
系よゆきとくいとくいとくいとく

約ありとせめり兵とささ
しそら忠成ハ忠成が陣よとく
凱旋のら伊前りをいとく
乃軍功とえとくいとく忠成も又
先りよとくいとく程作一戦功と
云ふとくいとくいとく鷹貴と
て子石れ領地をとくいとく

文和二年

白蓮院殿乃おのりいとくいとく伊書院

善此紀元とすれ

日甲子日白此玉推葉山一揆の紀

安倍甲子五高と忠成 命とすけ

下りり枝地よりをまじこさあまを

少法と

寛永三年 長五位下よ叙

玄蕃頭より候と

同八年

將軍家の約命をかりあり甲列

乃高と法とあ聖年よりいころと

江戸よりこれ

同年ゆき 命とすけさるりて

駿府の所城書を法とむこころと記

米地二子石とくりしゆふ

忠重

四節左衛尉 生國相模

元和四年

台漚院殿より一詔と

同八年 嚴命かんめいより一詔しゝ 沙書院殿しあごんより

一詔とありしありしし 沙書院殿しあごんより

一詔とありしありしし

忠永ちゆゑい

才大忠尉

元和元年三月三日より

一詔とありしありしし

大権現より一詔とありしありしし

同年夏大坂御陣の侍奉を

つとむ

同三年沙書院殿より一詔とありしありしし

忠愛ちゆゑい

長十郎

寛永四年

台漚院殿より一詔とありしありしし

同五年沙書院殿より一詔とありしありしし

女子

設樂兵庫元が妻

忠常 よひこ

加賀守 母石川日向守家成がしとめ
享正十八年相列小田原陣北とす
台徳院殿御中より十二歳より
ちごめより御出陣あり忠常十一
歳よりてきたるごひをより御つゑ

又 また 禄三年

台徳院殿乃御前よりとみよりえ服
伊達乃字とをゆりよげと記忠常
十五歳より
また長五子長尾系勝奥列りを
しと謀反りと記
大徳院殿より御前をよむとありて
小山より西陣をとよりとあり
台徳院殿八字部より御陣をとより

海軍父忠隣ハ流多シ此をり
小より 涉前をとる色すわら
忠常忠子父よりつりてその兵
なほびよと所屬と率く先鋒
り列とけり石田三成と方り
をいそ滞反するがゆり
台徳院殿本勇路を急務ひと涉と海
乃と此忠常信子を信とむ
日この冬迄立位下小叙一か賀およ

何と

同十年

台徳院殿將軍御お賀乃と此忠常ハ
序當乃役より

同十六年三十二歳少て卒

忠總

自叙 後日位下 母同お
外祖父日向守家成が家督と継わが
石川と号

教隆

右京亮 母月前

安永五年 奥列陣のとき 教隆
十五歳

台徳院殿よ侍奉し 宇都文り
いふれどもよ志す 石田三成と方
いしとていし 借教よつこ

台徳院殿本旨法を 隆く 清上候
あり 教隆幼少よりといへし 借教

位列 再取りし こと 記し
命ありし 江戸よ くれ

同十年

台徳院殿將軍 宮下のとき 記 教隆
堤立位下よ 叙し

日十七年 釣命よ ころし 西小姓組
乃 記し ころし

日十九年 父忠隣 勇勳 氣と
うり 小より 教隆も 川越よ 迂り

うねらへ和二年 奥列南部

寛永五年 仰教^{まが}宛ありて

よき

日十年

作^しりて

頭と

日十三

教勝

宗三郎

寛永九年

將軍家

教廣

本工

寛永十八年

竹子代君

女子

女子

女子

女子

幸伝 ゆきでん

主膳正 しゅぜんのちか

母ハ忠常ヨおるゾ はつねのちか

天文長五年奥列陣乃と紀十四歳

一七

台連院殿 たいれんいん

本旨 ほんし 語 ご 借 か 奉 ほう 一 位列 いちりつ 耳 みみ 取 とり 下 した

より幸伝幼年 ゆわい 乃 なり 終 はつ 一 乃 なり 終 はつ

命ありとく いのち 一 乃 なり 終 はつ 一 乃 なり 終 はつ

同十年

台連院殿 たいれんいん 將軍 しやうぐん 宣下 せんげ 乃 なり 終 はつ 幸伝

從五位下 じゆいご 一 乃 なり 終 はつ 叙 しよ 一 乃 なり 終 はつ

同十七年 終 はつ 一 乃 なり 終 はつ 乃 なり 終 はつ

頭 かみ 一 乃 なり 終 はつ 一 乃 なり 終 はつ

同十九年 父忠隣 ちゆだん 乃 なり 終 はつ 縁座 えんざ 一 乃 なり 終 はつ

川越 かわごへ 一 乃 なり 終 はつ 乃 なり 終 はつ 乃 なり 終 はつ 乃 なり 終 はつ

奥列 おくりつ 津 つ 輕 かろ 一 乃 なり 終 はつ 乃 なり 終 はつ 乃 なり 終 はつ

寛永五年 慈光をくさり江戸

くさり江戸

寛永十年 作よりし御書院あり

作よりし御書院あり

同十三年 旧役をあらしめく大者

頭とすれ

忠時

宗四郎

寛永十三年

將軍家を誅祀す

幸治

小者

寛永十八年 約命よりより

竹子代君より之をくすつれ

女子

女子

成尙

後五位下 内記

母八上りおるー外祖父ーやー

ふつれき子とがれうかゆよ石川

と号し

元和元多夏大坂御陣のとき成尙

奮撃一いつく敵の首二級と討と

了梅門乃ありて戦死とこの時

成尙二十回歳あり

忠尚

平右忠尉 母八上りおる

年いとけり

大持現

台蓮院殿ー渴ーをそまらふ

孝文長十九多父忠隣が縁座小より

相列小田原ー塾居と

寛永十多よめ

將軍家ーお湯と

日多乃秋御小姓こしやう継ついでり列なら一いち女に也や

忠村ちむら

清右衛門尉せいゑもんゑい

早世はやせい

母ははハ上かみりりあるあり

女子こし

母はは同どうあり

忠任ちuren

加賀守かがのさむらい 母ははハ奥平おくへい美佐みさ也や信昌のぶみちの女むすめ

大権現おほいけんげん乃なり御ご介すけ孫まご女むすめなり

安永やすえい長なが十六じゅうろく年ねん十二月じふにがつ忠任ちurenリりあり

大権現おほいけんげん

白徳院はくとくゐん殿どのをを孫まご一いちとと保たもつつり

将軍しょうぐん家け一いちノの孫まご也や父ちち忠常ちんじょうがが送おく込こ

とつぎ領地りやうち二に万まん石いしとと賜たまひひ時とき忠任ちuren

八歳はちさいなり

同十九どうじゅうく日にち正月しょうがつ祀まつり父ちち忠隣ちんりんがが縁ゆかり座ざ也や

寛永二年 誓辰

寛永二年 涉教

台徳院殿

將軍家

同三年

將軍家 涉上洛のとき 忠任侍

同年十二月 位下 叙

加賀守 但次

同九年正月 涉列 加納の城と給

五万石と領地

同十一年

將軍家 涉上洛乃刻 涉列 侍

石の 益酒を 飲ト 是より 涉入洛

侍

同十六年 加納を あり 掃列

石乃 城を 海より 七万石と 領知

女子

母ハ 小おる 里見 安房 守が 妻なり

女子

母ハトヨ^{かん}ある^ぶ—^{あり}な^ぢ多^の法^の海^を也^が妻^め

女子

母ハ同^こあ^の川^を相^い成^ん身^の也^が妻^め

家^か紋^の上^の藤^の丸^の内^の大^の又^の字^の

